

石川県 金沢市

金沢城 惣構跡Ⅲ

～西外惣構跡(武蔵町地点)発掘調査報告書～

平成23年3月
(2011年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

石川県 金沢市

金沢城 惣構跡Ⅲ

～西外惣構跡(武蔵町地点)発掘調査報告書～

平成23年3月
(2011年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

例 言

1. 本書は、金沢市埋蔵文化財センターが金沢市市街地再生課の依頼で発掘調査を行った、道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 西外惣構跡（武蔵町地点）は金沢市武蔵町地内にあり、平成21年10月6日～同年11月17日にかけて現地での発掘調査を行った。
3. 発掘調査にあたっては金沢市埋蔵文化財調査委員会（委員長 橋本澄夫、委員 垣田修兎、谷内尾晋司、横山方子 敬称略・50音順）の指導の下で、新出敬子（金沢市文化財保護課主任主事）が担当し、本書の執筆・編集・写真撮影も行った。
4. 本書の指示は以下のとおりである。
 - ①方位は全て磁北で座標は国土座標第Ⅶ系に準拠する。水平基準は海拔高で単位は（m）である。
 - ②遺構図、遺物図の縮尺は原則としてスケールを付した。
 - ③遺物実測図の凡例は下記のとおりである。
 - 遺構略記号は、SD：溝 SK：土坑 P：ピット SX：その他遺構
 - 図版内の遺物番号は観察表および巻末の写真図版のそれと一致する。
 - 遺物観察表については以下のとおり。
 - ・計測値の単位は（mm）（g）を最小単位としている。
 - ・「番号」欄は遺物の個別番号を現し、図版内に示した遺物番号と一致する。
 - ・「器種」欄には土器の材質および種類を判明する範囲で記載している。
 - ・「遺存度」欄には復元した部位とその遺存率を記してある。
 - ・「実測番号」欄は遺物図の実測者の通し番号で、保管する遺物・実測図のそれと一致する。
5. 発掘調査で出土した遺物、作成した図面、写真台帳等はすべて金沢市埋蔵文化財センターで一括保存している。





目 次

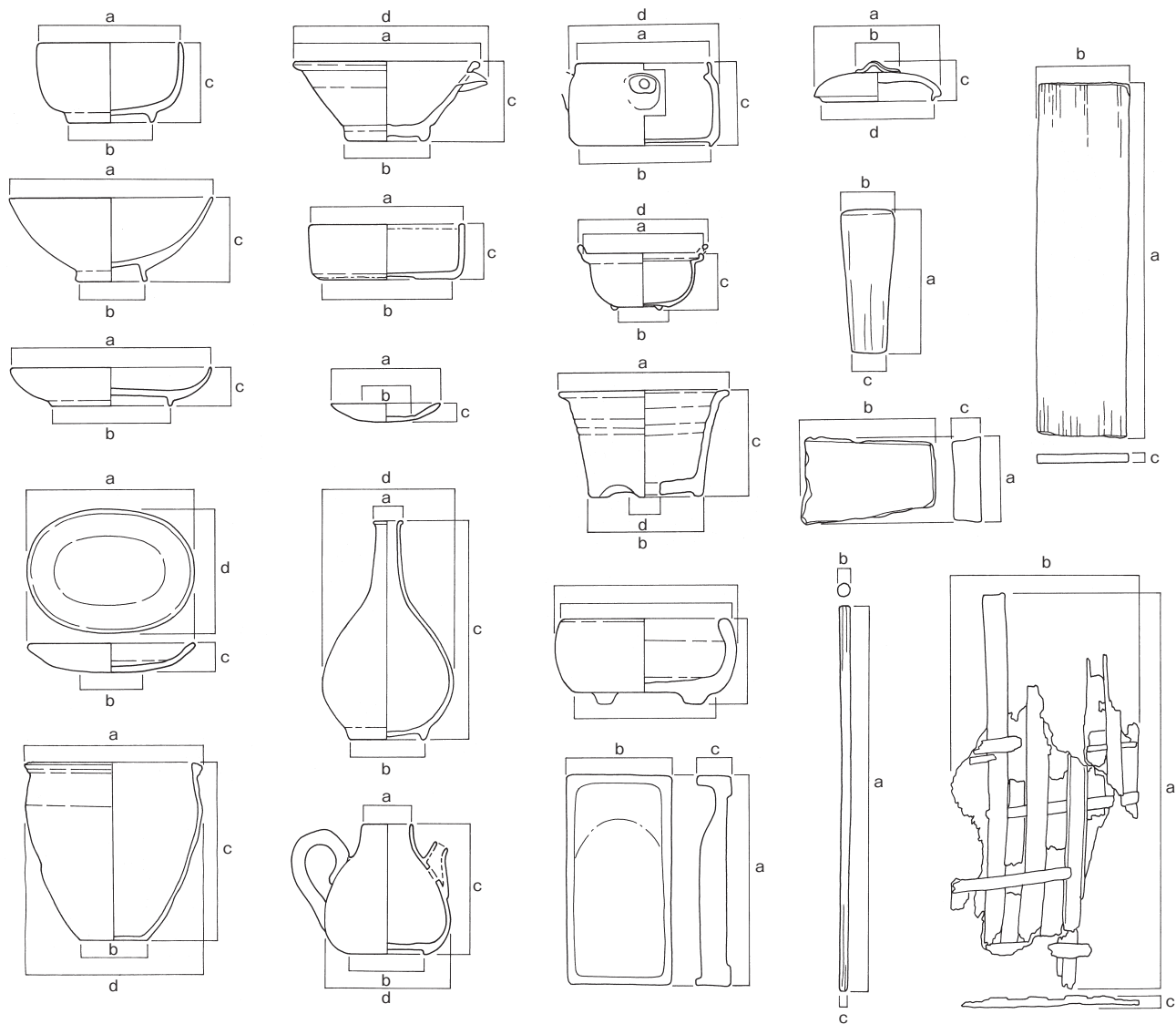
第1章 遺跡周辺の位置と環境	1
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第2章 調査に至る経緯と経過	4
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第3章 調査の概要	6
第1節 調査区の概要	
第2節 遺構と遺物	
第4章 総 括	15
補遺 武蔵町地内の立合調査で出土した土師器皿	16
遺物観察表	17
写真図版	
報告書抄録	

凡 例

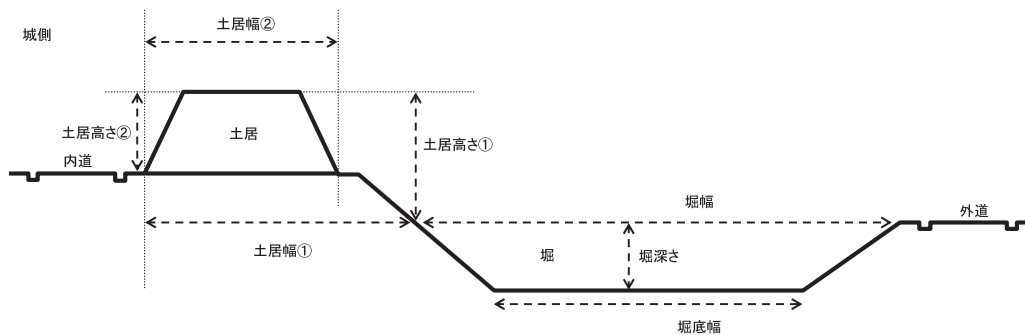
(1)遺物実測図の縮尺は、表題部分に記した。

(2)遺物実測図で必要な区分は以下のように記した。

青磁釉		赤 漆		黒 漆	
潤 漆		釉 薬		灯 芯 油 痕	
漆継ぎ		焼 継 ぎ		胎土目・砂目痕	



(3)惣構の規模等を示す名称は以下のように記した。



第 1 章 遺跡周辺の位置と環境

第 1 節 地理的環境

石川県は南北に細長い県で、能登と加賀地方から成り立っている。北と西は日本海に面し、東は富山県、南西は福井県、南東は岐阜県と接している。

金沢市は石川県の中央部に位置し、東は富山県小矢部市・南砺市に接し、西は日本海、南は石川県白山市、石川郡野々市町、北は河北郡内灘町・津幡町に接する。

地形は犀川源流域にある標高1,644mの奈良岳や富山県と接する標高939mの医王山などの山地から、丘陵部を経て金沢平野の北部に広がり日本海に面している。また、市の北部には、日本海沿岸に発達した内灘砂丘の内側に形成された潟湖、河北潟がある。(現在では、2/3が干拓され農地となっている。)

金沢平野は犀川を境に南部平野と北部平野に分けられる。北部平野は犀川、浅野川、金腐川、森下川などにより運ばれた礫、砂泥、シルト、粘土で形成された沖積平野で、低湿で傾斜が緩やかである。北部平野では古くから自噴地下水が各地でみられ、灌漑用や生活用として使用されるなど、市民に親しまれてきた。一方、南部平野は犀川、手取川、伏見川により形成された扇状地で起伏の多い地形である。地盤は礫、砂泥層の互層で一般的に水はけが良い。

北部平野にある西外惣構跡(武蔵地点)は金沢市の中心部、武蔵町地内にある。武蔵町は犀川と浅野川に挟まれた微高地にあり、犀川から約1.3km、浅野川から約1kmの距離で、両川の間地点に位置する。調査区の南東約300mには金沢市の繁華街、武蔵ヶ辻があり、北約600mにはJR金沢駅、南東約1kmには金沢市役所、金沢城跡、兼六園などがある。調査区周辺は市街地とはいえ、大通りから入るため閑静な住宅街となっている。

第 2 節 歴史的環境

調査区周辺の地形は犀川と浅野川に挟まれた微高地となっているため、水はけが良く古来より人々が生活を営んできたと考えられる。周辺地域の最古の生活痕としては、金沢城石川門前土橋および車橋門調査区の盛土層から旧石器時代後期の剥片石器がみつかり、出土地点を含む一帯が狩猟場であったと想定されている。

縄文時代の遺跡は前田氏(長種系)屋敷跡で落とし穴が見つかり、

弥生時代の遺跡としては、前田氏(長種系)屋敷跡がある。弥生時代後期後半から終末期の墳丘墓で、中心部に1基、その周りに4基の木棺が検出されている。本町一丁目遺跡からは終末期の集落跡が見つかり、また、広坂遺跡、高岡町遺跡でも弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が確認されている。



第1図 石川県および金沢市の位置図

古墳時代末の遺跡としては、高岡町遺跡があり、日本に伝来しなかったと考えられていた半瓦当が出土した他、奈良二彩や銅製帯金具が出土するなど特異な性格をもつ集落跡である。

奈良時代に入ると広坂遺跡で藤原宮式軒平瓦と平城宮式軒瓦が出土し、古代寺院の存在した可能性がある。前田氏(長種系)屋敷跡からは粘土採掘土坑や小穴が検出され、古代の土器が出土している。

中世には高岡町遺跡で薬研堀が検出された他、彦三遺跡でも溝と遺物が報告されている。広坂遺跡では礎石建物跡や堀跡が検出されている。戦国時代には浄土宗本願寺が現在の金沢城がある場所に金沢御堂を建立した。周囲には寺内町が形成されたと考えられるが、この時期の遺構が検出されていないため、詳細は不明である。

近世の調査区は西外惣構となっている。惣構とは城を防御するために造られた堀や土居のことで、金沢には内と外の惣構が造られた。内惣構は二代藩主前田利長が高山右近に命じて慶長4年(1599年)に造らせ、外惣構は三代藩主前田利常が慶長15年(1610年)に篠原出羽守一孝に命じて造らせたといわれている。遺跡の東に隣接する西外惣構跡(武蔵町地点・平成17年度調査)での発掘調査では、惣構の変遷や周辺環境が明らかになった。1610年頃の築造等初段階(I期)、17世紀末～18世紀初頭頃の堀の東岸を改築した段階(II期)、19世紀前葉の堀の大半を埋めた段階(III期)の3段階の遺構変遷が確認された。さらに、堀の堆積土の分析から、よどんだ水に棲むプランクトンや、松の花粉などがみつき、土居に松が植えられていた可能性があることがわかった。また、同じく西外惣構跡である西外惣構跡(升形地点)では、平成20年度～平成22年度にかけて発掘調査が行われている。ここでも時代が下るにつれて堀が埋め立てられていく変遷が明らかになっている。升形は宮腰往還が城下に入る入り口にあたり、惣構の堀と土居を屈曲させて方形の閉鎖空間と門があった。発掘調査から17世紀には素堀の堀で幅が推定約10.8mあったとわかり、18世紀末には石垣の堀で幅が約5mに狭められたことが明らかになった。平成20年度に3次にわたり発掘調査が行われた西内惣構跡(主計町地点)では江戸時代の惣構土居斜面を確認している。17世紀中頃～19世紀前半の堀幅は11mであったが、明治時代に現在の堀幅と同じ2mに狭められたことがわかった。平成18年度に発掘調査が行われた東内惣構跡(枯木橋地点)でも堀が埋め立てられていく変遷が明らかになったほか、堀の両側に石垣が築かれていたことが判明した。北国街道の東側の玄関口に当たる部分なので、堀の両側に石垣が築かれた可能性がある。また、武家屋敷跡が確認された広坂遺跡でも西外惣構の土居の盛土跡と土とめ石、土居の内側の道路跡などがみついている。この他、上級武士の屋敷跡がみつかった下本多遺跡、前田氏(長種系)屋敷跡、武士の下屋敷跡が検出された穴水町遺跡や、武家地を調査した彦三遺跡、兼六元町遺跡、長町遺跡、武家地と町屋が隣接する地点を調査した安江町遺跡、町屋跡である昭和町遺跡や本町一丁目遺跡、高岡町遺跡、下堤・青草町遺跡など多数の遺跡が周囲に存在する。

参 考 文 献

- (株)角川書店 1981年 『角川日本地名大辞典17石川県』
金沢市 1999年 『金沢市史 資料編19考古』
金沢市 2009年 「金沢城 惣構跡」



- ①西外惣構跡(武蔵町地点) ②東内惣構跡(枯木橋北地点) ③西内惣構跡(主計町地点) ④西外惣構跡(升形地点) ⑤西内惣構跡(尾山神社西地点)
 ⑥広坂遺跡(土居)・金沢21世紀美術館南側水路(堀) ⑦宮内橋詰遺構(土居・堀) ⑧尾山神社南側(土居) ⑨西外惣構跡(本多町3丁目地点)
 ⑩兼六園山崎山(土居・堀) ⑪常福寺裏(土居)

A* 金谷外柵御門前土橋 B* 不明御門前橋 C 西町橋 D 十間町橋 E 近江町 F 袋町 G 新町橋 H* (奥村内膳殿)後惣構土橋 I 九人橋 J 蔵人橋
 K 稲荷橋 L 枯木橋 M 量屋橋 N 宮内橋 O 香林坊橋 P 右衛門橋 Q* 村井又兵衛殿前橋 R* 長又三郎殿前土橋 S 図書橋 T 升形橋 U 東末寺橋
 V 塩屋町土橋 W 剣崎辻橋 X 備中橋 Y 下材木町橋 Z 小鳥屋橋 ☆山崎山横虎口(仮称)

註 A～Zの橋名は『金沢惣構絵図』(文化八年・1811年)及び*を付した橋名は『金沢道橋帳写』(文政七年・1824年)による

- ⑦金沢城跡 ①長町遺跡 ②前田氏(長種系)屋敷跡 ③本町1丁目遺跡 ④下草・青草町遺跡 ⑤高岡町遺跡 ⑥兼六元町遺跡 ⑦彦三遺跡 ⑧下本多遺跡
 ⑨穴水町遺跡

第2図 金沢城惣構跡と関連調査の位置(S=1/10,000)

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成20年4月15日、武蔵地区住宅市街地総合整備事業に係る市道建設に先立ち、金沢市市街地再生課から金沢市文化財保護課に試掘の依頼があり、平成20年9月5日、9月16日、10月28日に計6.3haの試掘調査を行った。平成20年11月28日付けで西外惣構跡にかかる部分160㎡以外の場所は遺跡無しである旨の回答文を提出。これを受け、文化財保護課と市街地再生課との協議の結果、市道が西外惣構跡部分にかかる160㎡分の発掘調査を実施することになり、平成21年10月6日調査に着手した。

第2節 調査の経過

発掘調査は平成21年10月6日～同年11月17日まで実施し、西外惣構跡を確認し、近世の土器および木製品を中心として、容量36ℓの遺物箱3ケース分の遺物が出土した。

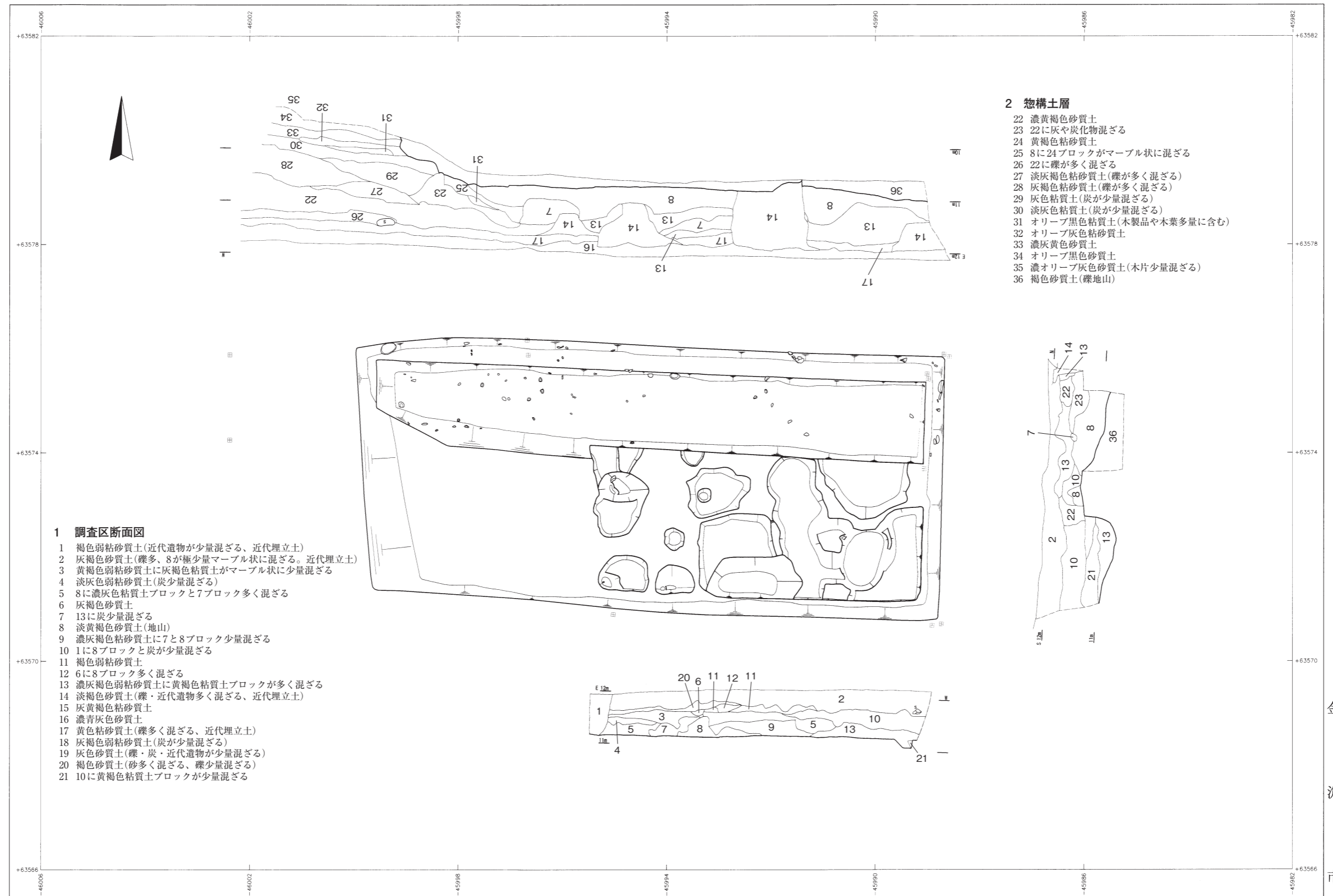
発掘調査日誌抄

10月6日	表土掘削(東側)。土砂搬出。 ガードフェンス設置。	10月29日	表土掘削(調査区西側)。土砂搬出。
10月9日	プレハブ・トイレ等搬入。発掘機材搬入。	11月2日	トレンチ掘削。
10月13日	グリッド測量開始。機材搬入。	11月6日	トレンチ掘削。写真撮影。
10月14日	屋外作業員作業開始。	11月9日	トレンチ掘削。屋外作業員作業終了。
10月15日	遺構検出。平・断面図作成。	11月10日	発掘機材撤収。
10月19日	遺構掘削。遺構写真撮影。土砂搬出。	11月11日	プレハブ・トイレ撤収。
10月21日	トレンチ掘削。遺構全体写真撮影。	11月16日	埋め戻し作業。
10月28日	写真測量実施。	11月17日	埋め戻し終了。発掘機材撤収。清掃。



第3図 調査区位置図

西外惣構跡(武蔵町地点)部分編集図



1 調査区断面図

- 1 褐色弱粘砂質土(近代遺物が少量混ざる、近代埋立土)
- 2 灰褐色砂質土(礫多、8が極少量マーブル状に混ざる。近代埋立土)
- 3 黄褐色弱粘砂質土に灰褐色粘質土がマーブル状に少量混ざる
- 4 淡灰色弱粘砂質土(炭少量混ざる)
- 5 8に濃灰色粘質土ブロックと7ブロック多く混ざる
- 6 灰褐色砂質土
- 7 13に炭少量混ざる
- 8 淡黄褐色砂質土(地山)
- 9 濃灰褐色粘砂質土に7と8ブロック少量混ざる
- 10 1に8ブロックと炭が少量混ざる
- 11 褐色弱粘砂質土
- 12 6に8ブロック多く混ざる
- 13 濃灰褐色弱粘砂質土に黄褐色粘質土ブロックが多く混ざる
- 14 淡褐色砂質土(礫・近代遺物多く混ざる、近代埋立土)
- 15 灰黄褐色粘砂質土
- 16 濃青灰色砂質土
- 17 黄色粘砂質土(礫多く混ざる、近代埋立土)
- 18 灰褐色弱粘砂質土(炭が少量混ざる)
- 19 灰色砂質土(礫・炭・近代遺物が少量混ざる)
- 20 褐色砂質土(砂多く混ざる、礫少量混ざる)
- 21 10に黄褐色粘質土ブロックが少量混ざる

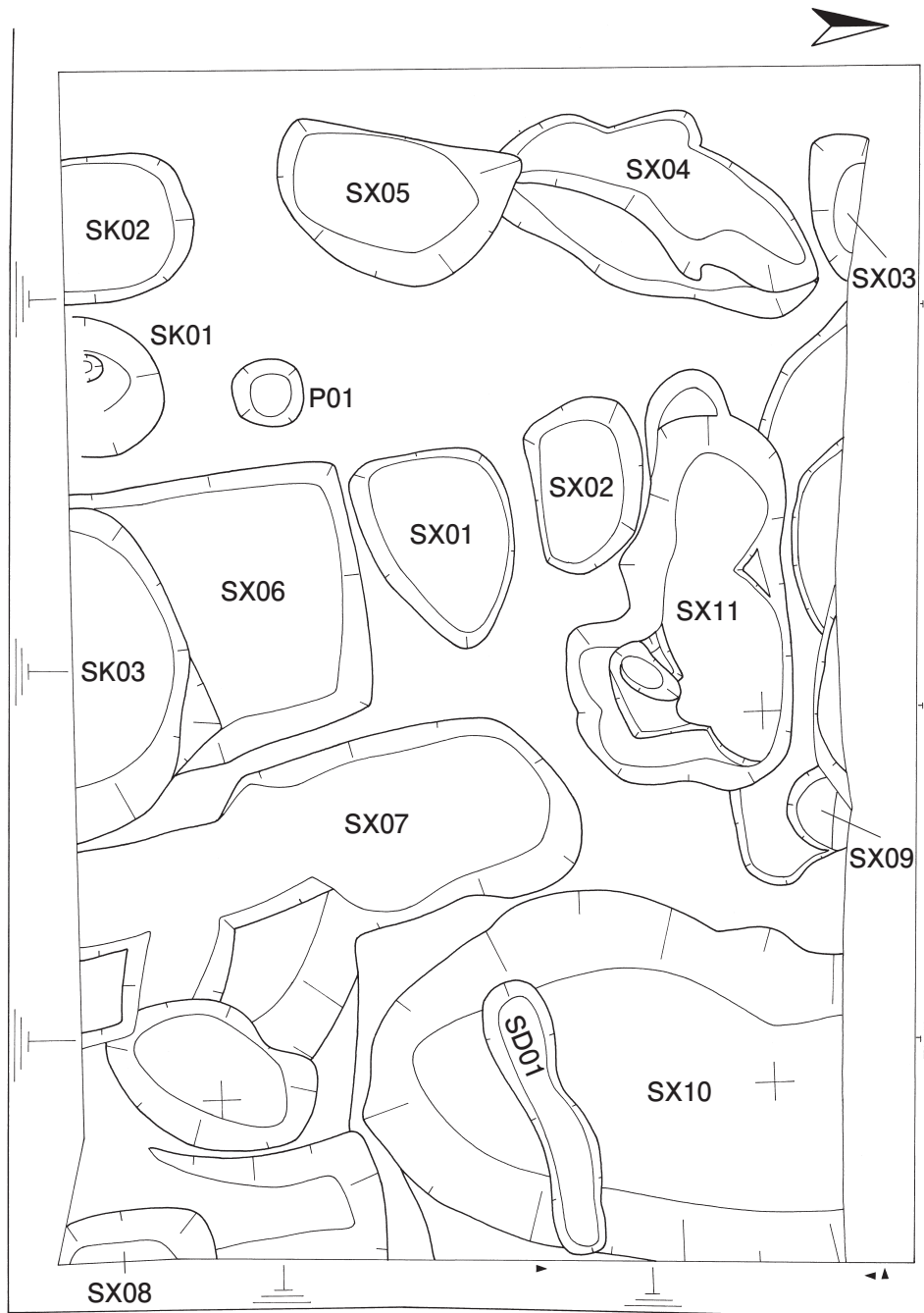
2 惣構土層

- 22 濃黄褐色砂質土
- 23 22に灰や炭化物混ざる
- 24 黄褐色粘砂質土
- 25 8に24ブロックがマーブル状に混ざる
- 26 22に礫が多く混ざる
- 27 淡灰褐色粘砂質土(礫が多く混ざる)
- 28 灰褐色粘砂質土(礫が多く混ざる)
- 29 灰色粘質土(炭が少量混ざる)
- 30 淡灰色粘質土(炭が少量混ざる)
- 31 オリブ黒色粘質土(木製品や木葉多量に含む)
- 32 オリブ灰色粘砂質土
- 33 濃灰黄色砂質土
- 34 オリブ黒色砂質土
- 35 濃オリブ灰色砂質土(木片少量混ざる)
- 36 褐色砂質土(礫地山)

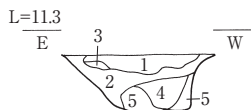
撮影 平成21年 10月 Canon 5D 座標系 第Ⅷ系【世界測地系】
測図 平成22年 3月 Summit

0 2 4 6m
1:80

第4図 調査区平面図と断面図(S=1/80)



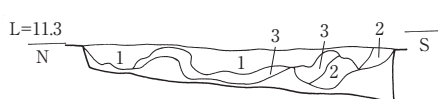
第5図 上層平面図 (S=1/40)



SK01

- 1 濃灰褐色粘質土
- 2 地山(淡黄褐色砂質土)に4ブロック多く混ざる
- 3 灰褐色弱粘砂質土
- 4 黒褐色粘砂質土
- 5 濃灰色粘砂質土(炭少量混ざる)

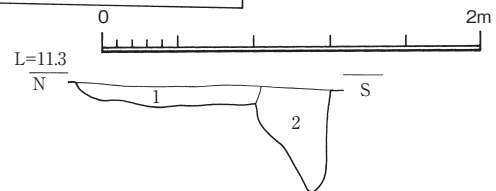
第6図 SK01断面図 (S=1/40)



SX04

- 1 灰褐色粘質土(地山ブロック少量混ざる)
- 2 灰黄褐色砂質土
- 3 淡黄白色粘質土

第7図 SX04断面図 (S=1/40)



SX06・SK03

- 1 灰褐色粘質土(地山ブロック少量混ざる、SX06)
- 2 濃灰褐色粘質土(地山ブロック少量混ざる、SK03)

第8図 SX06・SK03断面図 (S=1/40)

第3章 調査の概要

第1節 調査区の概要

調査区は調査直前まで駐車場および人家(2件分)として利用されており、発掘調査は主に人家跡を主体として行った。このうち、調査区西側の西外惣構跡にかかる部分は、鉄筋コンクリート建て人家跡で地下3m程度攪乱を受け完全に遺構が破壊されていたため、惣構を確認できたのは、調査区の北側で元駐車場下部分の幅1mに満たない狭い部分であった。調査区東側半分は木造住宅跡地で地下遺構は残存していた。

基本層序は、アスファルト直下には20cm程度の近代の埋立土(土層⑩)がある。その下にも近代の埋立土(土層⑪)が約20cm程度堆積している。その下は20cm～80cmにわたって土居と考えられる層位(土層⑦と⑬)が堆積するがほぼ無遺物である。その下が40～60cmにわたって堆積する砂質土の地山(土層⑧)である。地山の下には原地形と考えられる礫層(土層⑳)が現れる。

調査の結果、確認された遺構は江戸時代の惣構跡、土居跡、近代に入ってから土坑が3基、溝1条、攪乱10箇所、小穴を1基確認している。以下、遺構と遺物の詳細について述べる。

第2節 遺構と遺物

惣構跡(第4・9・10・12・13図) 調査区北西端で検出した。上述のとおり大半が現代の攪乱を受け、わずか80cmの幅しか遺構が残っていなかったため、深さは地表から2m50cmまでしか掘削ができず、堀底を確認していない。土層断面をみると、礫層の原地形は内道から外道に向かって緩やかに下り坂となっている。この地形を利用し低くなる部分に惣構を造成している。砂質土の地山を掘り込んである位置を惣構の東岸と仮定すると、岸から外道の中心(推定)までの距離(惣構の幅)約9.8mを測り、内道までの距離(土居があったと考えられる部分)は9.5mを測る。惣構の層位は、⑳・㉗・㉘・㉙・㉚層が幕末～明治時代にかけての埋立土で、㉛～㉝層が惣構の堆積土であると考えられる。㉛層には木製品や落ち葉や木片などの有機物を大量に含む層である。

出土遺物は、上層としたのが、㉒・㉖層で近代の埋土である。17～19が出土している。17は在地の施釉土器の植木鉢である。19はいぶし瓦である。その他近代の陶磁器類や瓦などが少量出土している。堀下層としたのが明治期の埋立土と推定される㉒・㉗・㉘・㉙・㉚層である。出土遺物は20、26と少ない。20は肥前産の鉢で白泥により彩色してある。底部が厚く作られている。26は肥前産京焼風陶器の碗である。内外面に細かな貫入が入る。また㉛～㉝の砂質土層から出土したものは21～25、27～33である。21は古瀬戸の瓶である。外面は緑釉が施され、底部は無釉となっている。22は肥前産磁器の猪口である。18世紀前半のものでコップ型を呈し全体的に薄い作りになっている。23は肥前産磁器筒碗で見込みには松竹梅文が描かれている。24は肥前産陶器鉢で内面に鉄釉と白泥で刷毛目文様が描かれている。口縁部は大きく外反し先端部がつまみ上げられている。25は肥前産陶器碗で京焼風陶器である。高台部分が無釉となっており、内外面の透明釉がかかっている部分には細かな貫入が見られる。27は産地不明の陶器碗である。内面は灰釉、外面は透明釉がかけられ、口縁部分に鉄釉による口紅が施されている。外面に鉄絵と染付がみられる29は肥前産陶器鉢である。30・31は肥前産陶器すり鉢である。この他、京焼碗の細片があるが外面に青と緑で上絵付けが施されている。信楽産の茶入れで鉄釉が施されたものの耳部分も出土している。㉛層から出土した木製品は62～72が箸である。68と69は赤漆が施されており、同一個体である可能性が高い。62～67は断面が方形で68～72の断面は円形である。73は漆器碗の口縁部で内面が赤漆、外面が黒漆となっている。74は杓子の頭の部分で、内面が赤漆で外面が黒漆となっている。75～79は曲物の蓋または底板と考えられる。75は中心に円形の穴が開けられ、外面に

黒漆が施されている。76～78は木釘痕が残存する。80は栓である。先端部になるにつれ細くなるよう丁寧な削られている。1ヵ所穴が貫通している。81～84は桶類の側板であろう。内外面に丁寧な削り痕が残る。85～90は板状木製品である。91～104は何かの部材として加工された木製品であろうが、用途不明である。100は先端部が細く凸状に加工してある。105は竹を編んだ加工品である。106～109は露卯下駄の歯である。露卯とは差歯下駄の一種で、下駄の台にほぞ孔を貫通させ、歯を固定させ使用した。

溝SD

SD01 (第5図) 調査区の東－西方向に走る溝で、規模は幅36cm、深さ4.3cmを測る小規模な溝である。出土遺物は産地不明の陶器甕破片1点である。外面にくすんだ鉄釉がかけられており、胎土は灰色で堅く焼き締まっている。

土坑SK

SK01 (第5図) 調査区南端中央付近で検出した。調査区外に土坑がかかるため平面形は不明である。規模は径71cm、深さ48cmである。出土遺物はない。

SK02 (第5図) 調査区南端中央付近で検出した。調査区外に土坑がかかるため平面形は不明である。規模は径80cm、深さ16.6cmである。出土遺物はない。

SK03 (第5図) 調査区南端中央付近で検出した。調査区外に土坑がかかるため平面形不明である。規模は径182cm、深さ38.7cmである。出土遺物はない。

ピットP

P01 (第5図) 調査区中央で検出した。平面形は円形で、規模は長径40cm、短径36cm、深さ12.6cmである。出土遺物はない。

その他の遺構SX・包含層

SX01 (第5・9図) 調査区中央で検出した。平面形は不定形で、規模は長径108cm、短径78cm、深さ12cmである。出土遺物は1の弥生時代末～古墳時代にかけての甕小片で内外面とも磨滅が激しい。2の土師器皿は外面口縁部近くに弱い段を持つ作りで内外面とも磨滅が激しい。3は肥前の磁器皿で蛇目凹型高台となっている。見込みに焼成時の目跡が1ヵ所残存している。19世紀前半代のものである。

SX02 (第5図) 調査区中央で検出した。平面形は楕円形で、規模は長径96cm、短径59cm、深さ9.7cmである。出土遺物はない。

SX03 (第5図) 調査区北端で検出した。調査区外に遺構がかかるため平面形不明である。規模は径90cm、深さ18cmである。出土遺物はない。

SX04 (第5図) 調査区中央北よりで検出した。平面形は楕円形で、規模は長径185cm、短径83cm、深さ15.7cmである。SX05に切られる。出土遺物は土師器皿の小片一片のみである。

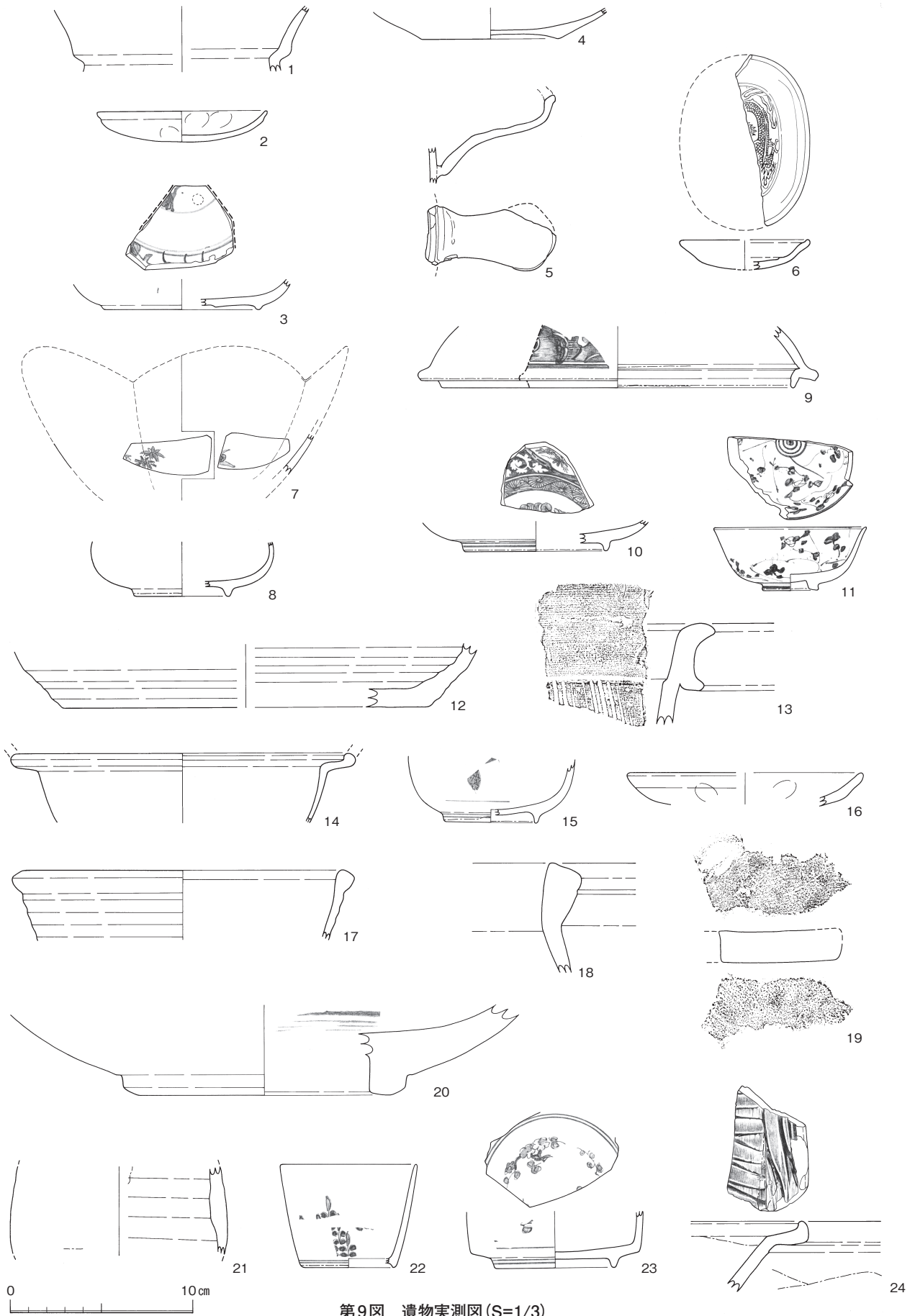
SX05 (第5図) 調査区中央で検出した。平面形は不定形で、規模は長径127cm、短径78cm、深さ15cmである。出土遺物はない。

SX06 (第5図) 調査区南端で検出した。平面形は長方形で、規模は長径163cm、短径148cm、深さ14.9cmである。出土遺物はない。

SX07 (第5図) 調査区南東端で検出した。平面形は不定形で、規模は長径238cm、短径100cm、深さ6.1cmである。出土遺物は4の土瓶である。その他、磁器細片3点、陶器細片2点が出土した。

SX08 (第5図) 調査区南東端で検出した。調査区外に遺構がかかるため平面形不明である。規模は径85cm、深さ8.3cmである。出土遺物は5の行平の把手のみと6の珉平焼の小皿が出土している。見込みに龍文の陰刻がある小判形の小皿で、鮮やかな緑釉がかけられている。その他、磁器片1点、土器細片3点、陶器細片2点が出土している。

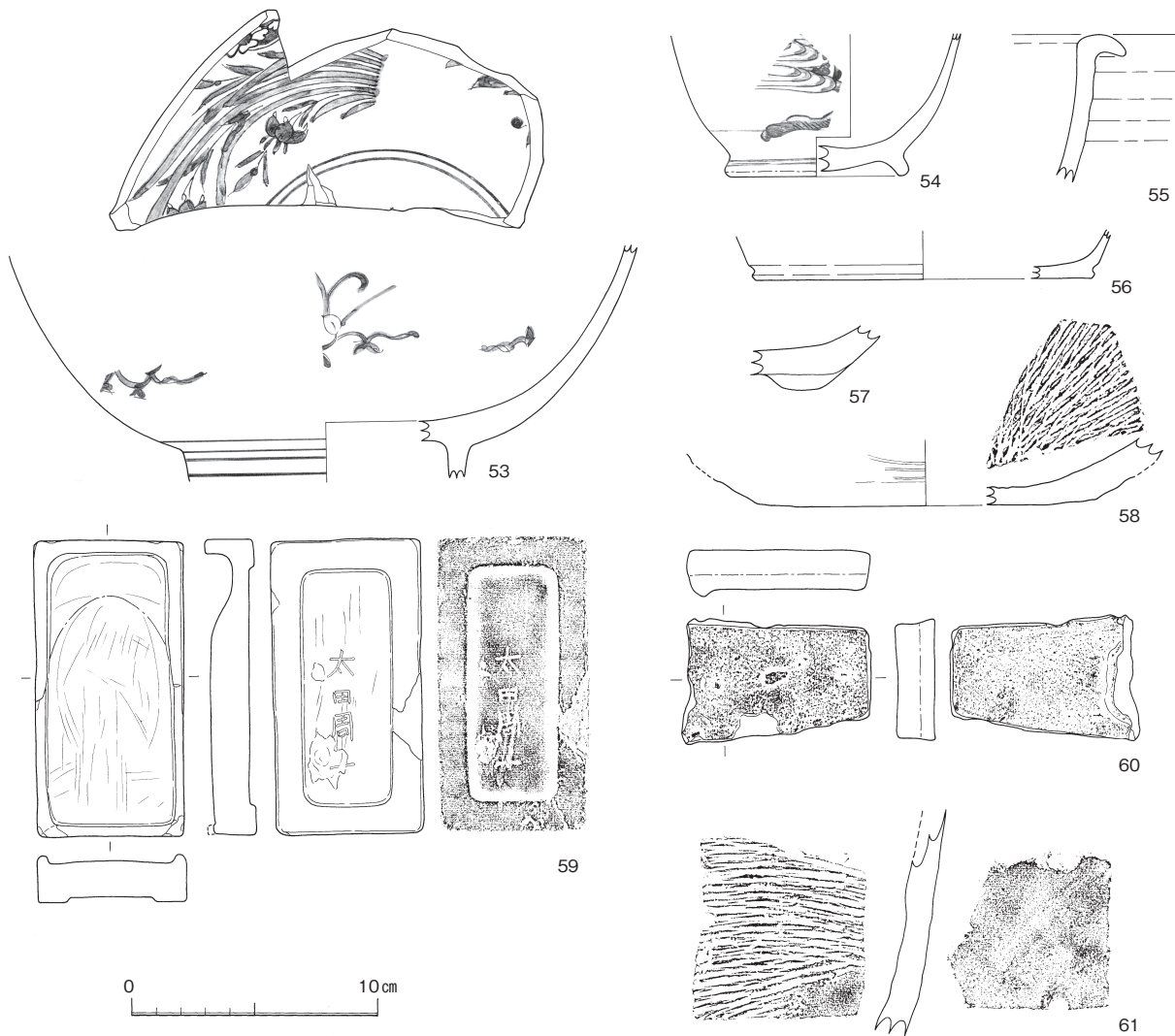
SX09 (第5・9図) 調査区北端で検出した。調査区外に遺構がかかるため平面形不明である。規模は径117cm、深さ41.3cmである。出土遺物は7～14である。7は肥前磁器の柿右衛門様式の鉢である。内外面に色絵が描かれ、型打成形されている。8・11は瀬戸の磁器碗である。9は肥前の磁器蓋で割口に漆継跡が残存している。10は肥前磁器皿である。12は越前の鉢底部で鉄泥が塗られている。13は肥前系すり鉢である。幅広の口縁帯で、外面に敲き成形跡が残る。



第9図 遺物実測図(S=1/3)



第10图 遺物実測図(S=1/3)

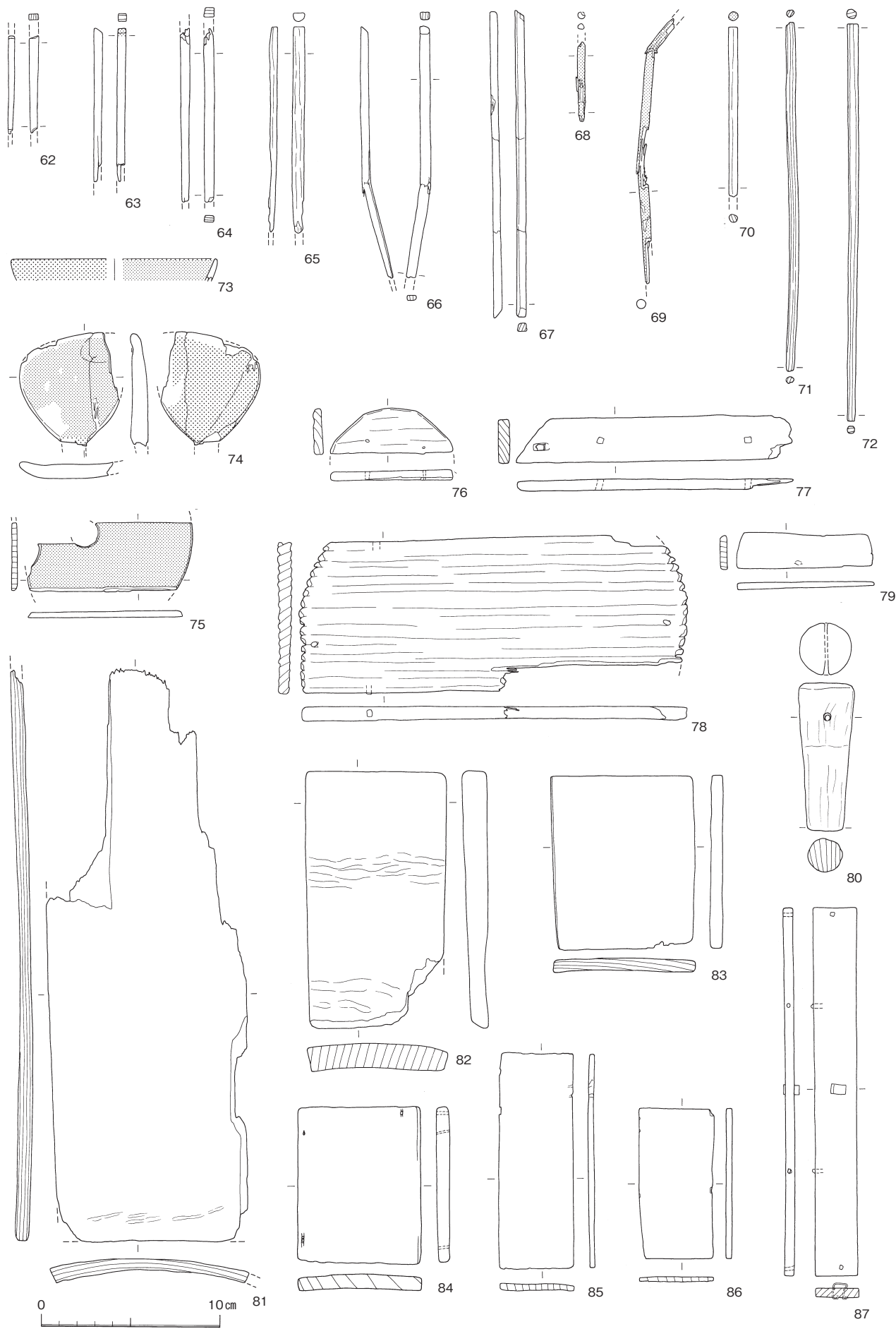


第11図 遺物実測図(S=1/3)

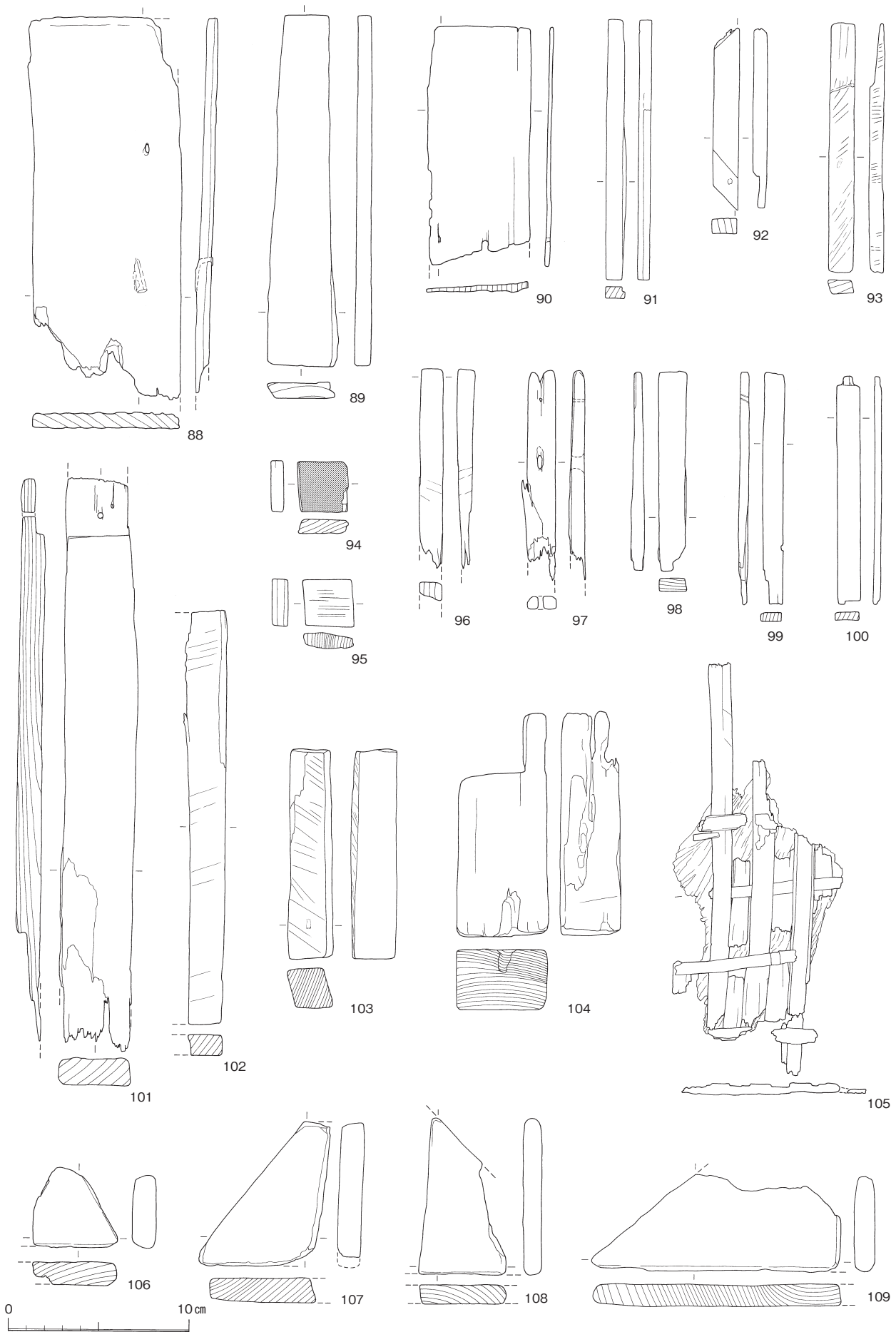
SX10 (第5・9図) 調査区南東端で検出した。調査区外に遺構がかかるため平面形不明である。規模は長径(検出している部分のみ) 260cm、短径195cm、深さ17.8cmである。出土遺物は14の土鍋と15の磁器碗である。その他土師器皿片が1片出土している。

SX11 (第5・9図) 調査区南東端で検出した。調査区外に遺構がかかるため平面形不明である。規模は径317cm、深さ61.2cmである。出土遺物は16の中世の土師器皿と鉄釉の瓦細片2片である。

包含層(第10・11図) 34は肥前産磁器碗で、高台内に銘があるが判読不明である。35は肥前産磁器碗で外面に矢羽根文が描かれている。36～38は瀬戸産磁器碗と思われる。36は内外面に染付がされたやや小ぶりの碗で口縁が外反する。38は銅板転写による細密な図柄が内外面にみられる。39は高台に砂が付着し、高台内面立ち上がり部分に鉋目のような跡が残る。40、41は瀬戸産磁器碗である。両者とも小ぶりで底部から口縁にかけてまっすぐ立ち上がる器形をしている。42は産地不明の磁器碗または猪口であるが、底部が非常に薄く作られている。外面に陰刻の格子模様があり青磁釉が施されている。43、44は肥前産磁器蓋物である。44は外面に草花文が染付で描かれており漆継痕が残る。45は肥前産磁器碗で高台が小さく砂が付着する。47は肥前産磁器皿で高台が蛇目凹型高台となっている。49は肥前産磁器碗で焼継痕がみられる。高台は小さい。50の皿と51の水注は銅板転写による細密な模様がみられる。水注は碁笥底で把手は竹のような意匠である。54は肥前産磁器壺で高台底部に砂が付着し、やや開いている。55は陶器鉢で産地不明である。胎土は濃い灰色で白い砂粒が多く混ざる。内外面に灰釉が施され、口縁は大きく外反する。58は肥前産陶器すり鉢で底部は平底である。59は硯で裏面に持主と考えられる人物の名前が刻まれている。その他、図示できない紅皿や灯明皿の細片や炭や貝殻なども出土している。



第12図 遺物実測図(S=1/3)



第13图 遺物実測図(S=1/3)

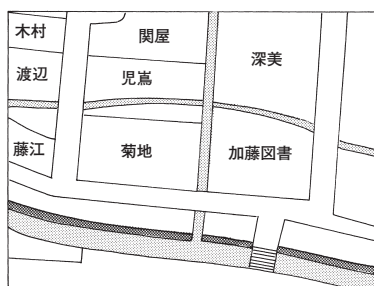
第4章 総括

今回は西外惣構に架かっていた図書橋から北へ約50mの地点を発掘調査した。調査の結果、素堀の惣構の東斜面を検出することができた。また、砂質土の地山を掘り込む、惣構の東岸を確認した。この東岸が築造当初の岸であることは調査区断面図から明らかになった。平成17年度調査区は平成21年度調査区から北へ約10mに位置する。このときの調査では東岸を17世紀末～18世紀初頭頃に埋立てた痕跡がみついているが、今回の調査では埋立土は確認できなかった。東岸側の埋立土は幕末～明治にかけてのもののみ判明した。堀の底は確認できなかった。調査では地表面から約2.5mまで掘削を行ったので、堀底は2.5m以上あることになる。

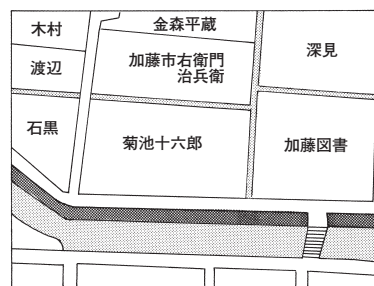
堀幅については、遺跡東側に隣接する現道が江戸時代の内道(土居の内側にある道)の位置と幅を踏襲していることと遺跡西側に隣接する現道の下を流れる暗渠用水の西端が江戸時代の惣構の西岸と仮定して測った推定値である。砂質土の地山を掘り込んである位置を惣構の東岸と仮定すると、築造当初の惣構の幅は約9.8mで土居の裾幅は9.5mである。平成17年度調査区では築造当初の惣構の幅は約14m、17世紀末～18世紀初頭頃には11mに狭められたと推測されている。計測方法の違いにより多少の誤差が生じることがあるだろうが、わずか10mしか離れていないのに幅が4mも狭くなっている。この幅の違いについては今後の発掘調査に期待したい。また、文政7年(1824年)の『道橋帳写』〔『金沢市史資料編6』加越能文庫「金沢道橋帳写」〕によると図書橋は「図書橋渡式間、幅式間、但石橋」とある。19世紀前半には堀幅が約3.6mに狭められたことがわかる。



第14図 現在の調査区位置図



第15図 天保14年頃調査区付近図



第16図 延宝年間調査区付近図

調査区周辺は現在では武蔵町となっているが、武蔵町という地名は昭和45年につけられた町名で、それ以前の町名は高岡町下藪の内、栄町、石屋小路などであった。

延宝金沢図(延宝年間は1673年～1681年。石川県立図書館蔵)でみると、調査区周辺は「加藤図書」「菊池十六郎」「石黒采女」「渡辺」「木村」「加藤市右衛門、治兵衛」「金森平蔵」「深見右京」の名がみられる。また、天保14年(1843年)頃に作成された金府大絵図(金沢市立玉川図書館近世資料館蔵)では、調査区周辺には「加藤図書」「菊池」「藤江」「渡辺」「木村」「関屋」「児島」「深美」の名がみられる。加藤図書家と菊池家の間には小規模な排水溝の様な水路が描かれている。調査区より少し南に位置すると考えられる。「加藤図書」は天正13年前田利家に仕えた宗兵衛重康(3500石)に始まる。重康-図書里重-九郎兵衛重次-図書重長-刑部重清-(1500石)-主水重休-図書里長-図書里直-図書里有-図書里路と続く。加藤図書の屋敷地前に架かる惣構の橋は図書橋と呼ばれていた。また、後に加藤図書の屋敷地跡に立てられた町は図書町と呼ばれた。

近年の発掘調査の成果により惣構跡の様相が次第に明らかになりつつあるが、まだまだ不明な点も多い。今後の調査が進むことを期待したい。

参考文献

- 株角川書店 1998年 『角川日本姓氏歴史人物大辞典17石川県姓氏歴史人物大辞典』
 株平凡社 1995年 『太陽コレクション城下町古地図散歩1 金沢・北陸の城下町』
 金沢市 1999年 『金沢市史 資料編18絵図・地図』

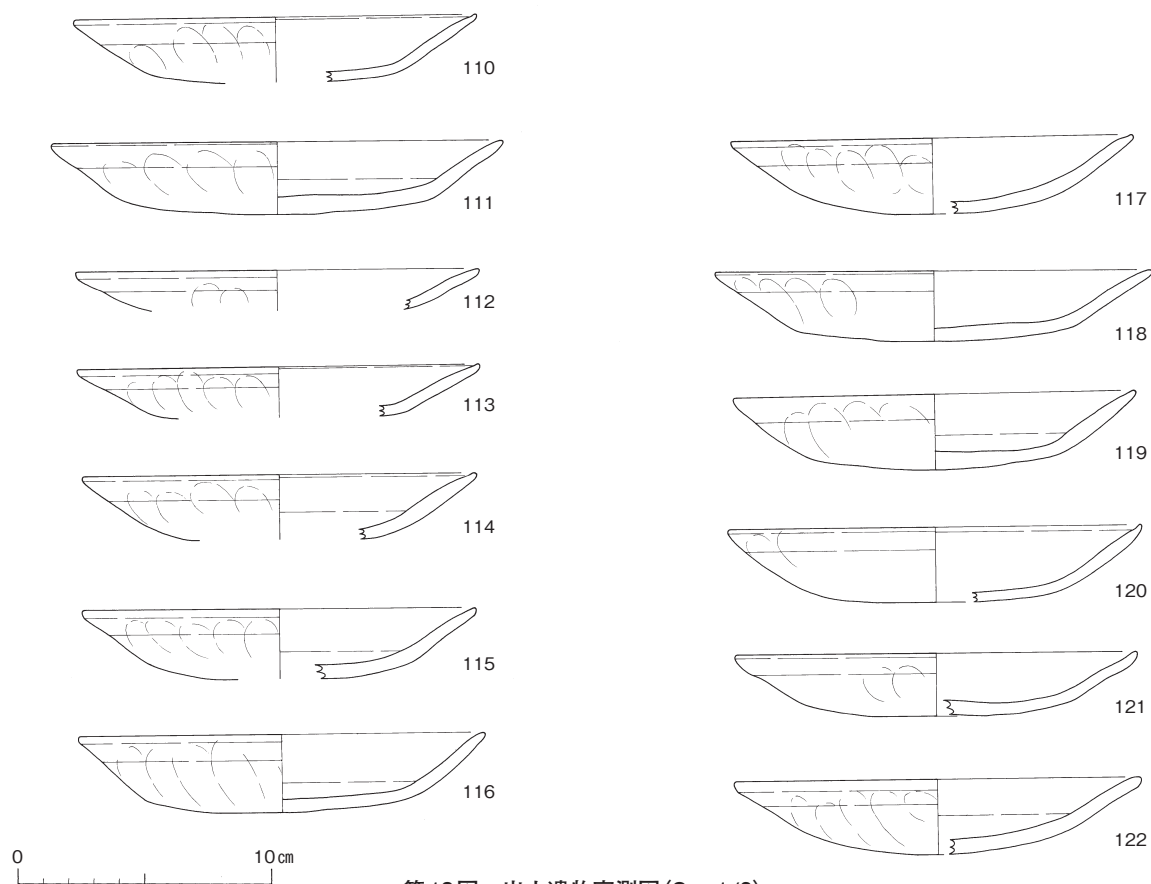
補遺 武蔵町地内の立会調査で出土した土師器皿

本調査終了後、調査原因である、武蔵地区住宅市街地総合整備事業に係る市道建設が開始され工事が進められていたが、平成22年2月2日、調査区から東に約20m離れた地点で、試掘範囲に含まれていなかった、現道以外の駐車場部分の掘削があるということで急遽、立会調査を行った。その際、土坑と思われる遺構から土師器皿がまとまって出土したので、補遺として報告する。

接合した結果、最低13個体あることが判明した。法量は多少のばらつきがあるが、概ね口径が16cm、底径が9cm、高さが3cmの大振りの土師器皿である。底部はやや丸く、体部は折れて立ち上がる。口縁部は外反し端部をつまんで仕上げている。広坂遺跡のP3087から出土している土師器皿に類似しており、時期は17世紀第2四半期後半頃となっている。胎土は淡褐色で、うち2枚は底部に焼成時の黒斑が残る。内面には作成時のナデ調整の跡が明確に残っていることから、長期間使用されていなかったことが伺える。儀式や酒宴などで使用され、一括廃棄されたものかもしれない。



第17図 調査区位置図



第18図 出土遺物実測図(S=1/3)

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしそとそうがまえあと(むさしまちちてん)さん							
書名	西外惣構跡(武蔵町地点)Ⅲ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号								
編著者名	新出敬子							
編集機関	金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)							
所在地	〒920-0374 金沢市上安原南60番 Tel (076) 269-2451 Fax (076) 269-2452							
発行機関								
発行年月日	平成23(2011)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしそとそうがまえあと 西外惣構跡 (武蔵町地点)	いしかわけん 石川県 かなざわし 金沢市 むさしまち 武蔵町	172014	なし	36° 34′ 19″	136° 39′ 10″	20091006 ～20091117	160㎡	市道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西外惣構跡 (武蔵町地点)	城下町	近世	惣構 土居	陶磁器・土器 木製品				
	近代	明治以降	土坑	陶磁器				
要約	平成21年度の調査は、平成17年度の調査区の南に隣接する箇所で行われた。調査の結果、西外惣構跡の幅が約9.8m、土居の幅が約9.5mあると判明した。							

石川県 金沢市 金沢城 惣構跡Ⅲ
 ～西外惣構跡(武蔵町地点)発掘調査報告書～
 (『金沢市文化財紀要 263』)

発行日 平成23(2011)年3月31日
 発行者 金沢市
 編集 金沢市埋蔵文化財センター
 〒920-0374 石川県金沢市上安原南60番
 電話 076-269-2451

印刷 吉田印刷
 〒920-0027 石川県金沢市駅西新町2丁目15-20



調査区全景(南から撮影)



調査区東壁



調査区東壁



調査区東壁



調査区南壁



調査区南壁



調査区南壁



調査区南壁



調査区北壁



調査区北壁



調査区北壁



調査区北壁



調査区北壁



惣構跡確認トレンチ



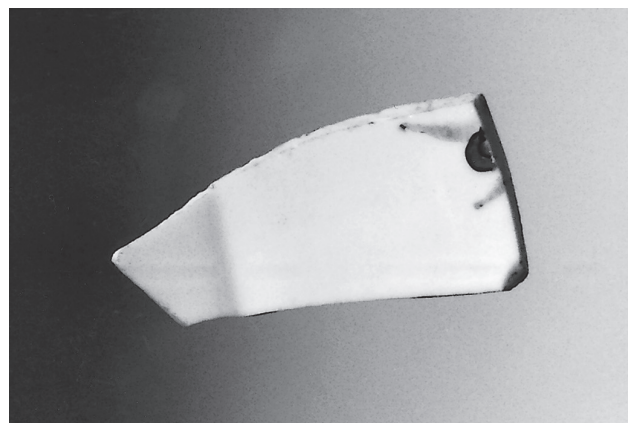
惣構跡確認トレンチ



惣構跡確認トレンチ



第9図 6



第9図 7



第9図 20



第9図 23



第10図 25



第10図 32・33



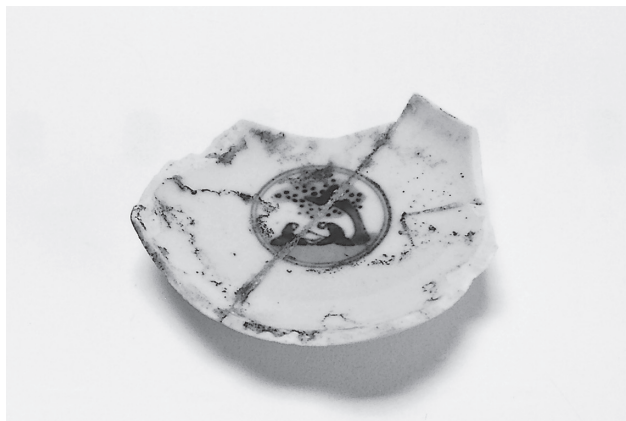
第10図 41



第10図 44



第10図 46



第10図 49



第10図 51



第11図 53



第12図 63~66、69・71・72



第13図 105



第12図 80



第18図 110~122